

不眠を訴えるある青年についての関係論的考察

大 倉 得 史

1. 問題と目的～青年の内面と外面をつなぐ試み～

青年心理学の古典となっているシュプラングーの『青年の心理』は、次のような一節から始まる。“青年期ほど、人が理解されたいという強い欲求をもつ時期はない。ただ深い理解によってのみ、青年は救われるかのである” (Spranger, 1924/1937, p5)。しかし、その一方で“青年自身、周囲に対して、彼の内面の微妙なひだを用心深く隠している” (同上, p5)。まさにこの記述にこそ、青年期の本質的特徴とその不思議さが凝縮されている。

例えば、河合 (1982, p73) は“子どもが大人となるというべき現象も、内部に生じる変革のすさまじさから見れば、死と再生の現象として記述するほうが、はるかに妥当であろう”と述べているが、青年の内部にそうした激しい動揺が生じていることを、多くの研究者や一般の人々が直観したり、かつて自ら経験したりしているにも関わらず、今や「大人」の立場に立つようになった者が、そうした内的動揺の詳細を知ることは容易ではない。青年はしばしばそれを大人の目から届かない場所にしまいこんでいる。したがって、青年が大人に与える外面的な諸印象から、彼（彼女）の内面をどのように了解するべきかということは、青年心理学の大きな実践的課題と言えるだろう。

こうした観点から見るとき、もちろん、シュプラングーも資料として活用しているような青年の日記や独白、私がかつて行ったような青年期にある友人との語り合い調査 (e.g. 大倉, 2002) などは、青年の目にどのように世界が映り、

そこを彼（彼女）がどのように生きているかを知ることができるという利点があり、一定の価値を持つと言えるだろう。それらは直接的に青年の内面世界がどんなものであるかを教えてくれる。

だが、それだけではまだ、青年が生きている内的世界と、青年が外に表出している態度とがどうつながっているのか、言わば内部と外部のギャップをどう埋めたら良いかということは明らかにならない。言い換えれば、大人が青年から受ける諸印象に基づいて彼（彼女）のことをより深く理解していくにはどうしたら良いのかとか、了解されることへの青年の拒絶に対してどのように応ずるかといった、実践的な関心には十分応えられないのである。

考えてみれば、青年の目に映る世界は、決して青年の内部で勝手に作られるわけではない。むしろ、それはしばしば青年と周囲の他者との関係性（鯨岡，1999）を基盤にできあがっていると考えられる。つまり、その世界には青年と周囲の他者の関係性が反映されているはずだし、逆に言えばその関係性のあり方に注目することで、青年が生きている世界をかなりの程度推し量ることができるのではなからうか。

本稿では、こうした問題意識に基づき、私が学生相談カウンセラーとして関わることになったある青年のあり方について考察していく。高い言語化能力を備えた一部の例外を除く多くの青年たちと同様、彼は自分の内面世界について、必ずしも雄弁に語ってくれたわけではない。そうした状況の中で、私自身も含めた周囲の他者と彼との関係性を手がかりにして、彼が生きている世界にどこまで迫れるのか。この試みは、かつて友人との語り合い調査によって記述した青年の内面世界と、現在の大人の立場から見える外面的青年像とをどのように統合したら良いのかという、今の私にとって極めて重要な問題に対する何らかのヒントを与えてくれることだろう。

なお事例の提示については、本人の了解を得ており、さらに細部に変更を加えていることを断っておく。

2. 事例

戸部守（仮名）、男、大学2年生。

地方のP町から大学に来て一人暮らしを始めたが、1年次の取得単位数が0単位ということで、学部が年度末に行った成績不振者相談会に母親とともに出席した。大学に入ってから引きこもり状態が続いており、学生相談室で対応してもらえないかとの依頼を学部から受け、関わることになった。最初、彼の担当として、Dカウンセラーが履修登録や授業への出席、生活改善のための修学支援を行っていたが、あまり状態が芳しくなく、私が心理カウンセリングを担当することになった。まず私が本人と出会う前に行われていたDカウンセラーとの5回の面談の概要を、その後、私との全14回の面談のうち前半7回分を提示する。本稿では全面談経過の中での戸部君の変化というよりは、むしろ彼の独特のありようについて詳述する意図から、一応一通りの問題が出揃う前半7回分に絞ることにする。

〔D1回目〕4月X日

本人の携帯に電話したところ、連絡がつき、面談に来てもらう。本人は履修届の日に行きそびれたので、もうダメだと思っていたらしい。まだ履修ができることを伝え、履修届作成と提出を援助する。面接時も顔色が悪く、頭痛を訴えており、生活リズム・体調ともに悪い状態。今後は定期的に面談を行い、支援していく。

〔D2回目〕X+1週

先週の面談日から授業へ出席しており、金曜日、月曜日と順調に出席。今日も元気がなく、ボソボソと話をする。週末は家にいることが多く、あまり外に出ることもない。大学をがんばっていきたいという気持ちはあるが、生活リズムの乱れと、ときにある精神的 불안定から来られなくなることが多いとのこと。

〔D 3 回目〕 X + 3 週

連休明けも休まずに授業へは出ているが、相変わらず顔色が悪く、きつそうな感じで来室。生活環境がかなり不安定な状態なので、早期に生活の改善ができるように援助していく必要がある。

〔D 4 回目〕 X + 4 週

授業へは順調に出席している。今日も疲れた顔をしている。とにかく本人に生活リズムを整えるように指導する。

〔D 5 回目〕 X + 9 週

X + 6 週から体調を崩し、1 週間学校を休んだ。その後、学校へ復帰したが、またその翌週より 2 週間続けて学校を休んでいる。面談時の本人の顔には表情がなく、質問に対してもボソボソと答える。この 2 週間は夜寝られない日が続いており、寝つけるのは朝の 5、6 時くらい。その間、「頭の中で過去の思い出が回り続けている」。どんな思い出なのかとの問いに、「小学校 3 年くらいの頃の嫌な思い出。でも人には話をしたくない思い出」と。あまりにも状態が良くなかったため、クリニックの受診を勧めたが、本人が嫌がり「自分で何とかできる」と言うので、1、2 週間ほど様子を見ることにする。

この面談後 1 ヶ月ほど間が空いた X + 13 週に、私は D カウンセラーから「今日、戸部君という鬱っばい子が来る。前から面談をしているのだが、なかなか心を開かないし、病院を勧めても行きたがらないので、良かったら一度話をしてみてくれないか」という依頼を受けた。彼の担当カウンセラーがどうしても突然そんな話を持ちかけてきたのか、全く経緯を知らなかったのでその意図がもう一つ分からなかったが、D カウンセラーの方で彼との面談に何か戸惑っているところがあるのだらうくらいに軽く考えて、とりあえず依頼を受けてみることにした。まず D カウンセラーが面談室で彼と話し、その後、私が入れ替わる

ことになった。

〔1回目〕X+13週

面談室に入った私を待っていたのは、頭を抱え、じっと下を向いたまま、微動だにしない彼の姿であった。青白い顔に、あまり手入れのされていない長髪、地味な服装と、生气に乏しい感じ。部屋にはどんと重たい空気が漂っている。咄嗟に「これは大変そうだ」と直感しながら、とにかくいろいろと声をかけてみるが、こちらの問いかけに数秒の間があった後、やっと聞き取れるぐらいの小さな声で彼が一言二言返事するという、かなりぎくしゃくした面談になった。

【会話の一部】〈 〉は私の言葉、「 」は戸部君の言葉、()は補足
〈どうも、はじめまして、大倉です。〉（戸部君、下を向いたままうなずく）〈…しんどそうやね。〉「…頭が痛くて…。」〈よくあるの?〉「…ときどきですわね。」〈…頭が痛くなるときってというのは、何か原因があって、なるの?それとも、特に理由もなく突然痛くなるの?〉「…さあ…。」〈…いつ頃から、そういうのが?〉「…小・中学校の頃からじゃないですかね。」〈…病院とかは行ってないの?〉「…行ってないす。」〈…病院はきらい?〉「…いや、そういうわけじゃないですけど…。」

*

〈…今、Dさんとはどんな話をしてたの?〉「…家族関係のこととかですかね。」〈ふうん…。…最近、授業は行ってるの?〉「いや、4、5、6月は行ってたんですけど、最近は…。」〈…行かなくなったっていうのは、何か理由があったの?〉「…先生の話とかが、遅れて入ってくるんですよ。その間にいろいろ自分で感じて。」〈感じる?〉「いろいろ、先生の言ったことに対して、自分の感じというのがあるんですよ。」〈…ふうん、そういうのがしんどくて?〉「……。」〈…ごめんね、僕、戸部君のこと、まだ何も知らないから、訊くんだけど、もし、しんどかったら言ってね。実家はどちら?〉（ちょっと不思議そうな顔をする彼。訊いたらまずかったのかなと思う）「P市です。」〈ああ、

P市…。(いつしか、かつて途中中断してしまった鬱病の人とのカウンセリングと似た感じだなという印象が生じてくる)>

*

<…普段はDさんとやっているんだよね。どんな感じですか？何話してるの？>
「…僕より、Dさんに訊いた方が早いと思いますけど。」<ああ、Dさんに訊けて話か…。…普段は、どんなことして過ごしているの？外出とかする？>「…外出はあまりしないですね。」<家で、どんなことしてるの？>「……本を読むとか。それぐらいしか、家ですることってないじゃないですか。」<うん、そうね…。…大学には、友達とかいる？> (うなずく彼。ちょっと意外に思う)<そうなんだ。友達と遊んだりするの？> (またうなずく。ちょっとうさく質問しすぎなのかなとも思う)<友達の家に行ったり？>「…向こうから来ることの方が多いですね。」<ああ…。友達とは何をして遊んでるの？>「…まあ、普通に話したり…。」<ふうん、じゃあ、家で本読んだり、友達来たときは、友達と話したり…。…どうなんだろう、何か今、元気が出ないーって感じだけど、友達と会うときもおんなじ？それとも、友達と会うときは…？>「今日は頭痛いんで。」(パンと拒絶されたような感じ)<ああ、そうか…。…どうしよかな、今日は、もう時間なんだけど、どうしよう。まあ、いつもDさんと話していて、そちらの方が煮詰まっていて、少し気分転換してみようかっていう感じだったら、僕と話してみる？(彼に対して、入れ替わり立ち替わりいろいろな人間が関わっていくという構造になっていることに違和感を抱きつつも、結局自分もそこにそういう人間として入ったのだなと思う)それか、やっぱりDさんがいいというんだったら、それでいいし。>「…ぶっちゃけ(ちょっと身を乗り出すように)、誰とやっても変わらないと思いますよ。あんまり人によって、この人には話すけど、この人には話さないって、悪いじゃないですか。」<ああ…。>「…どっちでもいいですけど。」<…そうか、(Dカウンセラーに今後どうするつもりなのか聞いていなかったな、自分がこんな形で替わってしまっているのかな、と思いつつ) どうしよう、どっ

ちでもいいって言うんだったら、ちょっと気分転換に替わってみる？もし、やっぱり適わんというんだったら、いつでも言うてくれていいし、『ぶっちゃつけ』で。」「…。」〈(ちょっと強引に)じゃあ、そうしようか。いつも、この時間なの？〉「…まあ、日によってですけど。…だいたいこの時間ですね。」〈そうしたら、来週の4時半でいい？〉「…。」〈何か、都合悪い？あるいは、本当はやりたくないんだとか？〉「…ま、いいです。(仕方なさそうにうなずく)」〈そうしたら、また、待ってます。〉

【1回目終了時の印象】

話しているうちに、この反応の遅さは、鬱病なのではないかと思う。その遅さに最初は「心を閉ざしているのだろうか」と思って、かなり戸惑ったが、むしろ本当に人の言葉を理解するのに時間がかかっているのだと思い直す。けれど、後から考えてみると、やはり反発というか、心を閉ざそうというか、面倒くさいというか、そうした不信感もあるように感じる。恐らく両方あるのだろう。Dカウンセラーも言っていた通り、来週は来ないだろう。電話して、引っ張り出す。仮に大学を継続するにしても、修学支援のための話し合いという形に持って行くには、相当時間がかかりそうだ。

〔2回目〕X+14週

面談の約束日には、来談せず。電話したところ、「明日なら大丈夫」ということだったので、次の日の3時から約束をする。時間通りにやってくる。顔色や服装などは相変わらずだが、先週に比べるとだいぶ元気そうで、結構話してくれた。

【話の概要】

夏休みは実家に帰る。父親はバスの運転手、母親は工場でパート。2歳年上の兄は首都圏で働いている。実家では特に何をする予定もない。どこか旅行に行きたい気持ちもあるけど、お金を使いたくない。あまり家が裕福だとは思わない。そう思うと甘えそうな感じ。でも旅行に行くとしたら、あまり派手でな

いところがいい。派手なところは、パンフレットとか出ていて、イメージが決まっちゃうじゃないですか。

最近は試験で友達も来ない。来るときはだいたい向こうから電話してくる。来たら来たで楽しいけど、後で片付けるのが面倒。自分が試験を受けていないことに対して、プレッシャーだとか焦りはあまり感じない。現実感がないというのも違う。違和感があるくらい。試験が終わって普通の日常になったら元に戻る。

【会話の一部】

(高校時代の剣道部の話から)「その部活の先生が怖かったんで、学校には一応行ってましたね。」　〈大学に入って、学校来なくなっちゃったっていうのは、何かきっかけがあったのかな?〉「いや、まあ、ちょっとした癖が出てしまっで。」　〈癖?〉「うん、まあ、いろいろですね。」　〈ふうん、その癖は小・中学校のときからあった?〉「まあ、中学生ぐらいですかね。中学生になるといろいろ思うじゃないですか。」　〈ああ、確かにいろいろ考え出すね。その癖が大学に入ってまた出て、って感じ?〉「…。(ちょっと違うという雰囲気)」　〈ちょっと違う?〉「うん、まあ面倒くさい…。」　〈癖っていうより、面倒くさいって感じかな?〉「いや、説明するのが面倒くさいっていう。まあ、癖ってことにしときましょう。」　〈そうね、じゃあ『癖』で。その癖っていうのは、毎日、時間帯によって、出てくるの?〉「夜ですね。」　〈深夜?〉(うなづく彼)　〈寝れないって言ってたもんね。その癖が出てきて眠れないのかな? しんどい?〉「まあ、考えようによっては…。」　〈それを何とかしたい?〉「まあ、何とかしたいっていうのはありますけど、何とかさせたくない。何とかしたいけど、何とかさせたくないって感じですかね。」　〈人には?〉「まあ、そうですね。」　〈人にはさせたくないんだ。〉「はい。」　〈…そうか、まあ、自分で何とかしなきゃいけないことっていうのもあるしなあ…。〉(彼も「そうだ」といった雰囲気であなづいている)

【2回目終了時の印象】

今日は比較的元気そうだった。自分から話してくれることも多かった。最後の「そうか、まあ、自分で何とかしなきゃいけないことっていうのもあるしなあ」は、初めて彼の感覚に近い言葉を返せたかもしれない。「癖」というのは何だろうか。今日の様子からは、単なる鬱病というのでもなさそうだ。ただ、「癖」という言葉で精神病圏の症状が名指されている可能性もある。

【3回目】X+15週

夏休み前、最後の回。約束の時間通りにやってくる。

【話の概要】

実家には明日か明後日かに帰る。新しい車を買ったからって、友達から召集がかかって。それに乗りに行く。車には、多分、一応、興味がある。友達は何か盛り上がってるけど、あまり周りが盛り上がると、自分は盛り上がらない。逆に周りが盛り下がっていると、自分は盛り上げようとする。その方がバランスいいじゃないですか。そんなの気にするようになったのは中学ぐらい。気づいたらそういう性格になっていた。

【会話の一部】

〈小さい頃は何やって遊んでたの?〉 「サッカーとか。」 〈へえ、(高校時代)剣道もやってたし、スポーツ好き?〉 「まあ、あれは意地ですけど。」 〈意地?〉 「兄貴がテニス結構うまかったんですよ。部長とかもやってて。だから、それはすぐやめて。その方がバランス取れるじゃないですか。剣道の方は兄貴がすぐやめちゃったんで、それは意地で続けて。」

*

「あとは歴史にも興味がありますね。定説ではなくて、「実は」みたいなのが好き。世界史の時間に、自分は日本史をやったりしていた。」 〈へえ、誰が好きなの歴史上の人物とかいるの?〉 「いや、誰が好きということもないですね。メジャーな人気者よりは、ちょっとはずしたところが好き。」 〈(天下人じゃな

くて)伊達政宗とか上杉謙信とか?」「ああ、伊達政宗は一番最初に読んだ伝記だったんで、個人的にはちょっと応援してましたけど。上杉謙信は何で死んだんでしたっけ?武田信玄の方は有名だけど。」

*

〈秋学期に向けてはどう?〉「とりあえず寝たい。」(「どうでもいい」という意味かと思って、私は思わずズッコケたという真似をする)「夜寝たいって感じですね。(ああ、切実な話だったのか、と気付く)昨日も朝4時まで起きていて、起きたのが3時半でしたからね。」〈昨日は何してたの?〉「野球見てて。今、ちょっと遅いんですけど、今はサッカーとかテニスとかの方が人気あるんですけど、自分、時の流れが遅いんですよね。何でだろう。」〈どここのファン?〉「いや、じいちゃんも父親も巨人なんで、僕は少しずれてヤクルトとか。」〈ああ、それも少しはずして。しぶいねえ。〉

【3回目終了時の印象】

まずは仲良くなることから始めようとした。結構、話が面白い。「バランス」へのこだわりは何だろうか。それと、ちょっと「ずらした」ところも。初回面談で、Dカウンセラーだろうと私だろうと平等に話すと言っていたことが思い出される。不眠の原因は何なのか。

〔4回目〕X+21週

最初は夏休み明けで久しぶりだったせいか、あるいは直前の別の学生との面談が重苦しいものでそれを私が引きずっていたせいか、どこかぎこちない感じで始まった。

【会話の一部】

〈夏休みはどうしてた?〉「いや、特に。」〈まあ、朝、起きるよね。どんな生活してたの?〉「あんまり覚えてないす。」〈…こっちにはいつ戻って来たの?〉「一応、昨日ですけど。」〈地元に戻って、友達の家乗るって言ってたよね?〉「え、ああ。」〈家の近くを?〉「ええ。」〈ふうん…友達

とかは久しぶりに会ったりした?」「あんまり久しぶりでもないですね。」
〈どれぐらいぶり?〉「半年ぐらいですかね。」〈久しぶりじゃん。〉「まあ、でも自分ではあまりそんな感じしなかったですね。」〈…あ、そうだ、秋は、どうするの?〉「どうするっていうと…。」〈昨日、帰って来たってことは、まだ履修登録してないよね〉「はい。」〈じゃあ、しなきゃ。〉(彼がうなづく)〈そうだな、これ終わったら、用紙を取りに行こうか。〉

*

〈で、どう、秋は?春は0単位だったでしょ。秋は、どういうふうにしていこうっていうのは、何かある?〉「いや、特には。まあ、でも崖っぷちなんです。」〈崖っぷちって感じ?〉「そうすね。…まあ、卒業だけはとりあえずしたいなって。」〈自分ではどれぐらいまでに卒業しようかなって?〉「まあ、あまり長くかからないように。」〈できるだけ早く?〉「そうすね。」〈そうか、じゃあ、そのために、秋は少しこうしようかなっていうのはあるかな。春は、何がまずかったのかな?〉「途中で失速しましたね。」〈うん、失速したっていうのは、どこらへんに理由がある?〉「まあ、ぶっちゃけ、寝坊っていう。」〈目覚ましとかはかけないの?〉「いや、あんまり目覚ましは受け付けてこなかったんで。」〈寝るの4時か、5時って言った?〉「ええ、まあ。」〈そうすると、遅くに寝て、自然に起きるんだから、起きれないね。〉「もう、ずっと起きておいた方がいいのかな。」〈あ、それは一つの手だね。1時間目に授業全部入れておくの。で、1時間目終わったら、帰って寝るという。〉「前、やったことあるんですよ。でも、朝、頭ボーとして。で、帰ってから寝れないときあるんですよ。いったん、寝るタイミング逃がすと寝れないすね。」〈ああ…。いつもは、何をきっかけで寝るの?〉「それが難しいんですよね。あくびが出たら、ああ眠いのかなって思うけど。」〈ふうん、じゃあ、今は何時ごろ寝てるの?〉「3時とか、4時ですかね。」〈起きるのは?〉「10時とか、11時とか。」〈え、思ったより早いじゃん。それだったら、十分授業に出られる。そしたらさ、今の生活リズムを(無理に変えようとせず)維持した

ら？何があっても3時には寝るの。で、11時には起きる。」「ああ、それは考えたことなかったすねえ。それはちょっといいかもしれないすね。春は、最後夜7時とかに起きてましたからね。」

＊

(友達が遊びに来て生活のリズムが崩れかかったらどうしようという話から)
〈そのときは、11時には必ず起きるってことにしたらどう？〉 「携帯のアラーム、5つあるから、それを近くに置いて1分おきに鳴らしたことがあるんですよ。けど、時間が過ぎてた。」 〈それ、近くに置いておくとだめだよ。歩いて行かないと止められないところに置かないと。僕、いつもそうするもん。〉 「ああ…。」 〈うん…そんな感じで、何か疑問点とかある？〉 「いや、まあ、やってみないと分からないいで。」 〈うん、そう、別に最初から成功するっていうのはなかなか難しいと思うよ。今までと違うことやるんだから。でも、失敗したら、また違った方法考えればいいんだから。…うん、そしたら、来週はやってみて、どんな感じだったか報告しにきて。(予約表を見ながら)どうする？11時には起きてるはずだよ。面談を11時半とかに入れてみる？(少しいたずらっぽく言う)〉 「やってみましょうか(笑)。」

(面談終了後、履修登録の用紙を取りに行き、1時間ぐらいかけて、登録票に記入して帰る)

【第4回目終了時の印象】

具体的に、起きるための方法を(本人ができそうな範囲で)提示してみると、思ったより乗ってきた。「やる気がない」わけでもなく、卒業への意思がないわけでもない。起きられない、だけらしい。生活指導や強制ではなく、「試行錯誤の実験」というスタイルもうまく伝わったみたい。さあ、来週、来られるかどうか。来られなくても、深刻にならずに、「ありゃ、だめだったか」みたいな感じで。来られたら、評価して、そのままじっと見守る。

〔5回目〕X+22週

面談の数日前に、戸部君の母親から電話があり、春学期の成績を踏まえて、今後のことを家族で話し合ってくると言う。現在、生活リズムを戻すために私といろいろ話し合いをしているということを伝えるが、「このまま平行線でしょうから、家族で話して来ます」とのことだった。

面談も結局11時半の約束には来られず。3時過ぎに電話で呼び出すが、来てみると、だいぶ元気。返答の仕方もいつになく早く、きっぱりした感じ。

【話の概要】

昨日、今日と、ちょっと調子崩して3時起き。でも、そのおかげで、今日はだいぶ調子いい。家族会議やっても、怒られるぐらいじゃないですか。中学校のとき、友達と深夜の学校に忍び込んで、授業中呼び出されて一日怒られた。まだ、中学校入りたてで、年上の人たちと一緒に、小学校の感覚で侵入した。そうしたら、車が入ってきて、物を壊し始めた。以前に兄貴も犯罪まがいのこととしてたから、家帰って「またか」みたいな感じで呆れられた。

父親には、小さい頃、叱られるときには手を上げられた。母親は、いろいろな意味で父親と一緒にいることが多いから、怖がってたんじゃないですか。あまり、かばってくれるとかはなかった。でも、父親は普段存在感なかった。熊の置物みたいな感じ。兄貴は、小さい頃、自分の好きなことを押し付けてきた。釣りとか。あまり好きじゃないから、やめたら、切れられた。

家族会議で何を聞かれるかとかは、あまり考えていない。言われて当たってたらずの通りだから聞くしかないし、違ってたらず何か言うし。(〈今、少しがんばろうとしていることが伝わったらいいね〉と言うと)いや、面倒くさい。わかってもらえるけど、あんまり、話すの得意じゃないんで。言葉を発しても片言になっちゃうから、あんまり自分のことアピールするのとか、嫌なんですよ。

【会話の一部】

〈昨日、今日と、3時起きになったっていうのは、何がきっかけだったのかな?〉
「ああ、多分、水曜日、9時ごろ電話が来て、11時ごろ宅急便が来て、それから

寝る間もなく、親が来たんで、そういった疲れが出た感じですかね。」〈じゃあ、これから、こういうふうになったときに、いかにしてリズムを戻すかっていうのが、問題になってくるね。〉「そうすね。」〈どうしよう、どうやって戻してみる?〉「…もうここまで来たら、寝ずに起きておくっていうのも手ですね。」〈うん、そうね。ずっと起きてて、次の日の12時ぐらいかに寝る。〉「それの方が、かえってできるかもしれないすね。ま、実験みたいな感じですね。」

【5回目終了時の印象】

家族のことを聞いたが、やっぱりあまりコミュニケーションのとれた家族状況という感じは受けない。家族に対してはどうでもいい感じというか、少しばかり攻撃性も感じる。母親も、本人のがんばる意欲を認めていこうとするよりは、「このまま平行線でしょうから、家族で話して来ます」と決め付けていた感じ。

生活リズムについては、失敗を繰り返しつつ、やってみようというスタンスに、うまく乗ってきてくれているのだが。家族の話し合いで、そのやる気が失われる可能性もある。

〔6回目〕X+24週

本人、母親、兄、私の四者での面談。兄も来たことが少し意外だったが、実家から勤め先のある首都圏に戻る途中に一緒に寄ったとのことだった。

【会話の一部】

(母) 非常に申し上げにくいんですが、このまま続けても、今まで実際に単位も取れていないわけですし、この先も厳しいんじゃないかということをやめさせようかと。今のままの生活を続けても、社会に出たら、クビでしょう。仕事に行かなきゃならないわけじゃないですか。だから、このままの状態を続けるよりは、一回放り出してみようかと思うんですよ。で、家族で話し合いをしまして、本人も、まあ、「それでいい」とは言わないんですが、かと言って、じゃあ、大学を続けたいのかということもはっきりしませんし。最後は

それで仕方ないんじゃないかということは納得しましたので。

(私) (本人はどう思ってるんだろう?) ご本人さんの意向は?

(戸部) …ま、それで仕方ないんじゃないですか。

(兄) まあ、いずれは働かなきゃならないわけですね。一旦、社会の厳しさっていうのを知らないと、このまま行ってもだめですし。そういった話をしましたら、本人の方もそれでいい、分かったと、納得しましたんで。

(私) これからは、どうしていくという話し合いはされました?

(母) 今、住んでるところが2年契約で、まだ契約残ってるもんですから、このまま一人暮らしをさせまして、こちらで就職活動をさせようかと。

(私) 戸部君は、それでいいの?

(戸部) まあ、ぶっちゃけ、大学やめるっていうのは良くないと思うけど、仕方ないんじゃないですか。実際、行けなかったんだし。

(私) 戸部君は、これからの生活についてどんなイメージを持っている? 具体的にこうしよう、とか。

(戸部) …まずは生活の建て直しですね。

(私) 生活のリズムが乱れてるっていうのを、立て直すために、こんな工夫を試みようとかは?

(戸部) …。

(私) 今までは、生活のリズムを立て直そうとしてたんだよね?

(戸部) いや、でも結局、できていないから一緒じゃないですか。

(私) まったくしてなかった?

(戸部) いや、そういうわけじゃないけど。

(私) これまでは、どんなことが難しかった? どんなところでつまづいたんだろう?

(戸部) やっぱ夜、寝れないっていうのが。いろいろ考えることがあって。

(兄) それを言ってみろよ。

(戸部) いや、言ったって多分理解しないから。

(兄) そんなの試してみないと、分からないだろ。お前がまず心を開かないと、仕方ないだろ。

(戸部) だって、そこまでの信頼関係できてないだろう。

(母) 本人、まだ、自覚が足りないと思うんですよ。働いていたら、眠くても何でも仕事に行かなきゃいけないじゃないですか。なのに昼間からだらだらして。

(私) あんまり昼間動いてないよね？

(戸部) ですね。

(私) 何か運動してみたら？

(戸部) 何をしたらいいんですか？（あまりに他人任せなので、兄・母とも失笑する）

(私) それは、戸部君が何をしたいかによるよね。何思いつく？

(戸部) 腹筋とか？

(私) おお、腹筋とか。

(戸部) 昼間から腹筋…(笑)。夜やってたこともあるんですけどね、寝れなかったですね。

(私) それは、寝る前に運動しちゃうとハイテンションになっちゃって逆効果だから(笑)。

*

(このまま放り出してどうにかなるわけでもないが、とにかく「やめさせる」という家族と、それに身を任せて半ば投げやりになっている本人に対して、付け入る隙をなかなか見出せない。大学行きたいのか、就職で良いのか、本人の態度がはっきりしないという話から)

(私) …そっか、(大学やめるんだったら)じゃあ、しっかり就職活動ががんばるんだって、はっきりさせないとだめだよ。

(母) そうなんです、ありがとうございます。私たちも本人が態度をはっきりさせないもんで。

(私) そうですね、ちょっと、いらいらと？

(母) もどかしいんですよ。父親なんかも、そんなのだったらやめさせて来いって感じで。

(私) お母さんの話分かるよね？その態度っていうのは、はっきりさせるのは難しい？

(戸部) まあ、ぶっちゃけ、もう少し考えさせて欲しいっていうのはありますけど。

(母) まあ、私たちもいろいろ考えることはあるじゃないですか、それでも何とか仕事行ったりしてますしね、そういうもんじゃないですか。

(私) そうですね、ただ、いったん崩れた生活のリズムを立て直すって言うのは大変で、特に一人暮らしだとなかなかそういった制約みたいのがないもので、そこで生活が乱れちゃう子も多いんですよえ。だから、具体的な工夫っていうのが、どうしても必要で、まあ、お母さん、モーニングコールをかけるなり、援助、まあ、援助というか工夫に対する援助ですね、まあ、本人さんがどうしたいのかっていうのもありますが、どういう工夫をしていくかっていうのを一度ご家族で話されてください。

(戸部) あんまり家族で話し合っても、話がどんどん違う方に行くんで、やっても仕方ないと思いますよ。…今週、また面談日ありますよね、もう一回話しに来ていいですかね。

(母) 本当に、家の家事とかはちょいちょいやったりしてたんですよ。それで、なんで、学校だけはっていう。

(私) へえ、面白いねえ。別に、じゃあ、仕事やれないってわけじゃないんだ。でも学校には来れないんだよね。

(戸部) なんか、中心が抜けてるって感じですかね。

(私) へえ、どういったあれなんだろ、何か邪魔してるのかな？

(戸部) ま、それはおいおい…。

(私) (このままだと、何かうやむやのまま大学をやめさせるということになり

そうだったので) そうしたら、どうされます?もう一度、ご家族で話されてみます?

(兄) まあ、本人も先生と話した方がいいだろうし。

(私) 戸部君もそれでいい?

(戸部) (うなづく)

(私) ま、僕の方から、やめろとも続けろとも言えないので、最終的にはご家族と本人さんで決めてもらえばいいと思うんですが…。

【6回目終了時の印象】

何か「意思」「思い」が無視されたまま、事が運んでいるという違和感。本人の「意思」「思い」だけでなく、母親や兄の「意思」や「思い」も。みんなが大学をやめさせる(やめる)ことを望んでいないのに、現実はその方の方に動いている感じ。父親の決定が強いのか?次回、彼は話しに来るだろうか。彼の最後の力に期待。

〔7回目〕X+24週

3時半の約束だったが寝ていたとのこと。今日来ないとまずいだろうという思いで、電話をかけ、5時から面談を始める。

【会話の一部】

〈何か、前、言い残したことあった?〉 「…言い残したことっていうか、言い残したことは別に無いですけど。」 〈言い残したっていうか、何か、いつもあんな感じで、あんまり自分の意見言わせてもらえないの?〉 「…ま、そんなもんじゃないですかね。自分も言わないからじゃないですかね。」 〈…何か、絶対、分かってもらえないだろうって言ってたよね?〉 「うん、まあ、言ってもしょうがないんじゃないですかね。」 〈あんまり、自分と意見が違っても、親とは、そうやって関わらないようにしてきたの?〉 「そうすね…小さいときから、ああ、違うなっていうのがたくさんありましたから。」 〈ふうん、これまでで一番違うなっていう出来事はどんなのだった?〉 「…まあ、

小学生のときに仲良かった友達、結構一緒にタバコ吸ったり、ビール飲んだりしてただけど、その友達を否定されたときですかね。」〈ああ、ちょっと、まあ不良っぽいことをやってるからって、あいつとは付き合うなって?〉「自分たちも間違ってることしてるのに、みたいな…。」〈ああ、付き合うなって言う割には、自分たちは何だっていうのが。〉「まあ、そうですね。」〈それで、戸部君は、そのときはもう親の言われるがままに?〉「別に言われても、付き合っていましたけど。まあ、親の言うことも間違ってるときもあるなと。当たり前ですけどね。」〈(間違っているというのは) どころへん?〉「…まあ、これはプライバシーもあるんで、あれなんですけど、小学生ぐらいから、まあ親も大したことないなと。」〈ああ、小学生から…。小学生って、普通、まあ親の言うことは正しいと思ってる時期だから、大したことないなと思ったときは、ショックだったんじゃない?〉「そうですね、まあ、でも、考えようですけどね。こんなもんかって。…何て言うかな、自分の中にもギャップがあって、外側にもギャップがあるっていう感じですかね。」〈ふうん…自分の中のギャップ?〉「うん、やっている自分と見ている自分と言うか…。脳みたいな感じですかね。」〈ああ…。〉「そういうのって、言葉で説明するの難しいし、普通、分かってもらえないじゃないですか。」〈うん、そうねえ。…学校の話になって悪いんだけどさ、そのやっている自分と脳というのがあって、脳が「ちゃんと行かなきゃ」みたいなのに、やっている自分が動かないみたいな感じなの?〉「まあ、そんな感じですね。」〈そうかあ、それは、なかなか両親には分かってもらいにくそうだね。この前も、『やらなきゃいけないの分かっているなら、やりゃいいやん』みたいな感じだったもんねえ。〉

*

「親が熱いんで、自分はちょっと色を変えてみようかなと。」〈ああ、親が赤色だったら、戸部君は青色って感じ?〉「まあ…そうですね。とりあえず、ちょっと冷静に見ますね…。」〈…そうかあ、まあ、今のままで行ったら、大学をやめさせられる方向なんだよね?〉「まあ、そうですね。」〈でも、まあ、僕

の意見ではね、どうなんだろう、今やめて、就職活動って厳しくない?」「そうですね。」〈僕の考えでは、まあ、生活リズムを立て直すのも、大学に来ながらの方がいいんじゃないかと?〉「…まあ。」〈何か、そこでさ、とりあえず、態度をはっきりさせるというので、大学に行くと親に言うことは、それは親の赤色に染まることなんだろうかと?〉「…大学をやめるにしろ、続けるにしろ、親の色に染まるとも言えるし、そうでないとも言えるし。」〈ああ、うん…。〉「自分でも何言ってるかよく分からない…。」〈言おうとしてることが、難しいからじゃないかな?〉「ていうか、あんまりしゃべるの得意じゃないし、短くしゃべろうと思うじゃないですか。そのしゃべり方がマニアックだから、なかなか通じない。」〈ああ…。でも、なんか、全部分かったとは言えないと思うけど、今日の話、何となくは分かったよ。〉

＊

(終了間際になり、結局のところ大学を続けるのか、やめるのか、とにかく結論出さないといけないと私の方で焦ってくる)「人を見るのが楽しいですね。」〈人を?〉「何か、自分の考えてないところから出てくるから…。」〈(なんで人の話をしだしたのか、まったく意味がつかめないまま)…うん、だとしたら、その人に会うためにはどうしたらいいんだろう?〉「うん?どこでも会えるじゃないですか。別に町歩いてても、テレビでも。」〈あ、そうか…。〉「…まあ、これも言っているのかどうか分からないんですが、今みたいな誘導尋問は…いや、いいです。」〈うん?ああ、今みたいな誘導尋問はやめろって?…そうだね、だって、僕、まあ、正直言って、戸部君がまあ、大学続けるっていう方向で言い出してくれたら一番いいなあと思ってるから…。でも、良くないね、誘導尋問は。〉「いや、こういうことを、何が言っていることなのか分からないんですが。」〈いや、僕との話では何でもどんどん言って。〉「いや、今度から遠慮します。自分でも考えることいろいろあって、よく分からない。」〈本当は、そういった話を、少しずつ聞いていければ良かったんだけどね。〉「僕も話しませんでしたしね、今日話したようなこと。でも、普通、人に言わない

のに、なんで話したんでしょうねえ。それが分からないから…。」〈(今日、結論出すのは無理と判断) …そっか、まあ、ご両親は多分、退学って方向で動き出すと思うけど、どう？まあ、ぎりぎりまで話に来ない？〉(彼がうなずく)〈僕もなるべく誘導尋問しないようにするしさ。〉

【7回目終了時の印象】

親も大したことないなと思ったという小学生のときの出来事。そこから、彼は親に何も言わず、自分の中で言いたいことを封じる「しらけ」になった。でも、思春期によくある見る自分と見られる自分の分裂などということを、どうしてそんなに「人には分からないこと」と決め付けているのか。私の理解が浅いのか。本質的には、人に自分の感覚なり考えなりを出すのが怖いんだと思う。だから、それを出しても大丈夫な場、この面接の場が続けばいいと思う。その中で少しずつ出していけるようになれば。だから、誘導尋問はもつてのほかだ。彼を裏切ることになる。このままでは大学をやめさせられる、けれど、私には何もできない。彼(どこかにあるはずの彼という主体)が決めることだ。

3. 考察

①他者から理解されることへの諦念

非常にふくよかな意味に満ちた戸部君との面談であるが、まずは、彼の特徴の一つである「自分は人から決して分かってもらえない」という深い諦念に着目するのが良いだろう。「言葉を発しても片言になっちゃう(5回目)」「そういうのって、言葉で説明するの難しいし、普通、分かってもらえないじゃないですか(7回目)」という言葉や、面談中しばしば見せる「(説明するのが)面倒くさい(例えば2回目)」という態度に、それはよく表れている。私としては、よく見てみれば結構味のある彼の言葉遣いに想像をかき立てられて、もっと聴きたいという気分になることも多かったのだが、それ以上のことを言おうとしない彼に対して、これはあまり突っ込んではいけない事柄なのではないかと変に

身構えてしまうことがしばしばあった。恐らくその警戒感は、自分のことをさらけ出したときに果たして他者から分かってもらえるだろうかという彼自身の警戒感と、身体的に呼応したものであったに違いない。彼自身は、他者と自分自身との間に深い断絶があるというイメージを、「外側にもギャップがある(7回目)」という言葉で表現している。

他者には自分のことを分かってもらえないという諦念は、どこから生じたものだろうか。それを考えるには、彼が面談中に時折見せた敏感さ、態度や言葉の端々から他者の気持ちを察する感受性の高さがヒントとなる。

例えば4回目の面談で、生活リズムを整えるための具体的な方法を「試行錯誤しながら一緒に考えていこう」とするこちらの意図を敏感に察して、彼自身もそうした構造に乗ってきてくれているが、この構造を作るとはそう容易なことではない。こちらからの提案を「こうすれば良いのだ」という押し付けや強制的なものと捉える学生も多い中で、彼は私の言外の態度や口調からそれが「試しにやってみる」というニュアンスのものであると感じ取り、面談終了時のこちらのいたずらっぽい提案に対し「(朝11時に面談を) やってみましょうか(笑)」と調子を合わせたり、次の回には「まあ、実験みたいな感じですね(5回目)」という言葉で表現したりすることができている。「思ったより乗ってきた(4回目)」という私の印象は、私自身の技術以上に、こちらの意図を敏感に察する彼からの寄与が大きかったことの裏返しである。

彼の感受性の高さが最も顕著に現れたのは、7回目の終了間際のやりとりであろう。突然、「人を見るのが楽しい」と言い出した彼の連想の流れについていけず、早く大学をどうするか結論を出さねばならないという焦りも手伝って、私は思わず「その人に会うためにはどうしたらいいんだろう？(大学に来るのが良いよね?)」という「誘導尋問」をしてしまった。神田橋も指摘する通り(2000, p132)、こちらが答えを用意しておきながらあえて尋ねるような類の質問は、教師と生徒の関係など上下の序列の中で用いられるものであり、彼とともに一緒に問題を考えていくという横並びの構造の中では「いやらしい」匂い

のするものとなる。そうした言外の味わいをすぐさま感じ取り、こちらに返してこうとする辺りに彼の感性の鋭さが、また言おうとして「いや、いいです」とすぐ引っ込めてしまう辺りに上述の諦念がよく出ている。

さらに、こうした抗議が行われるということは、次のことも示唆していると思われる。すなわち、「誰とやっても同じ(1回目)」と頑なに心を閉ざしていた初回に比べ、「もう一回話しに来てもいいですかね(6回目)」「でも、普通、人に言わないのに、なんで話したんでしょうねえ(7回目)」などと徐々に信頼関係ができあがってきていたのは、問題を一緒に考えていこうとする横並びの対話を粘り強く作り上げようとしてきたからこそであるということである。そうしたこれまでの対話構造とは根本的に異質な発言を私がしたからこそ、彼がそこに違和感を訴えもしたのである。

神田橋(1997)はこうした横並びの対話構造を「三角形の対話」と呼び、精神療法においてこの構造を維持することがクライアントとの安定した治療関係のために重要であるとしている。また、鯨岡(2006)は関係発達論の立場から、子どもが主体的になっていくのは、大人によって一個の主体として受け止められることを通じてであると述べ、子どもと大人との間に相互主体的な関係を築くことが「育てる」という営みの本質であることを指摘している。恐らく、三角形の対話を志向しつつ、彼に現状を何とかしようとする主体性が存していることを信じながら静かに語りかけてきたことが、彼からの信頼を徐々に得ることにつながってきたのだらうし、一個の主体として彼が私に抗議をするという場面も出てきたのだと考えられる。

ともあれ、コミュニケーションにおけるこうした言外の機微に敏感な彼が、家族の人々と日常生活のさまざまな場面ですれ違いを経験してきたことは想像に難くない。普段は「熊の置物(5回目)」のようであり、叱るときには手もあげたという父親の話からは、細やかな感情を察知するような繊細さよりは、少々のことには動じない昔気質の頑固さを感じるし、テニス部の部長というリーダー的立場にあった兄も、彼の好みに関わらず「自分の好きなことを押し付け

てきた(5回目)」という。また、母親についても、「いろいろな意味で父親と一緒にいることが多いから、怖がってたんじゃないですか。あまり、かばってくれるとかはなかった」と話しており、自分の思いに寄り添ってもらったというイメージは乏しいようである。神田橋は、人の資質を“筋肉運動優位・言語優位・感覚優位と三分して”(井上・神田橋, 2001, p61)考えることがケースの理解に役立つと述べているが、戸部君の場合、どちらかと言えば筋肉運動優位の家族の中で、感覚優位の彼の資質が無視されてきた可能性が考えられる。

例えば、6回目の四者の面談では、母親、兄ともに、大学をやめることを戸部君本人が「納得した」という形に、半ば強引に持って行こうとしている。むしろ、戸部君本人が態度をはっきりさせようとしないうちに、このままだったらと在学させることはできないという家族の主張にも当然一理ある。「私たちもいろいろ考えることはあるじゃないですか、それでも何とか仕事行ったりしてますしね、そういうもんじゃないですか(6回目・母親)」という言葉や、「まあ、いずれは働かなきゃならないわけですしね。一旦、社会の厳しさっていうのを知らないと、このまま行ってもだめです(6回目・兄)」という言葉は、まさに「正論」である。けれども、そうした正誤では片付けられないような複雑な感覚や思いを、戸部君本人は今生きているのではなかろうか。

「もどかしいですよ。父親なんかも、そんなのだったらやめさせて来いって感じで(6回目・母親)」という言葉からも推測されるように、恐らく今の家族の中にはどうして彼が煮え切らない態度をとろうとしているのかを考えようとする視点や、「ぶっちゃけ、もう少し考えさせて欲しい(6回目)」という彼の希望に耳を傾けようとする姿勢が、ほとんどないのだと思われる。言わば心の微妙な揺れ動きや迷い、葛藤といった複雑なプロセス抜きに、結果と行動が全てと言わんばかりに結論を迫っている感がある。極端な例えかもしれないが、「やるのか、やらないのか」という決断結果が何よりも重んじられる体育会系の部活に、「やりたい気持ちと、やりたくない気持ち」のどちらも切り捨てられないような繊細な感覚体験をしている少年が紛れ込んでしまったようなものである。

私は何も家族を責めようとしているわけではなく、そうした場合にはその少年と他の成員の間の相互理解が難しくなるのではないかと言っているのである。

興味深いのは、「生活のリズムを立て直すために何とか頑張ろうとしているよね?」といった形で、彼の努力や現在進行中の内的プロセスに焦点を当てようとする私の問いかけに対して、戸部君本人が、「まあ、ぶっちゃけ、大学やめるっていうのは良くないと思うけど、仕方ないんじゃないですか。実際、行けなかったんだし(6回目・戸部)」とか、「いや、でも結局、できていないから一緒じゃないですか(6回目・戸部)」などと、結果重視の答え方をしている点である。つまり、戸部君自身が、(半ば家族に対する皮肉も込めつつであろうが)言わば「体育会系」の発想や、筋肉運動優位型の人たちのコミュニケーション・パターンを身につけているのである。怖い先生がいる剣道部に「意地で(2回目)」在籍し続けたことや、「短くしゃべろうと思う(7回目)」ことは、もしかしたら筋肉運動優位型の環境に何とか自分を適合させようとする彼なりの努力だったのかもしれない(むしろ、彼自身はそれを自覚してはいないだろうが)。

恐らくはかなり繊細な戸部君にとって、言葉になりにくく明確な行動にもつながらないような諸々の感覚体験を、敏感な感受性を用いた言外のコミュニケーションによって他者と共有するような機会が、是非とも必要だったに違いない。けれども、彼はそうした生来の資質を認められるような経験にあまり恵まれて来なかったのだと思われる。むしろ、筋肉運動優位型の人とコミュニケーションをとる際に用いるような簡潔な言葉によって自らの内的感覚を表現しようとし、それが叶わないことにもどかしさを覚えつつ、複雑で曖昧な内的感覚を人には決して分らない部分として、自分の中で分離させてしまったのではなかろうか。

「しゃべるの得意じゃない(7回目)」と言う割に、彼の短い一つひとつの言葉は微妙なニュアンスや味わいに富んでいる。7回目だけを見ても、「やっている自分と見ている自分」「脳みtainな感じ」「親が熱いんで、自分はちょっと色を変えてみようかな」「誘導尋問」など、彼の内的感覚を的確に言い当てていると

思われる言葉は少なくない。本来、その内的感覚はもっと複雑で豊かなものであり、たくさんの言葉を継ぎ足してもなかなか表現しがたいものなのであろうが、何とかそれを一言で言い当てようとする「マニャック（7回目）」なところが彼にはある。なかなか鋭いイメージ表現力を持ちながらも、結局一言でというのが難しいから自分は口下手だということになるし、実際問題としてなかなかその独特の感覚を周囲の人には分かってもらえないのだろう。分かってもらえないという挫折経験を積み重ねてきたから、人に対して自分の感覚を伝えることに臆病になって、ますます言葉少なになっていく。「人には分かってもらえない」という彼の諦念は、そのようにしてできあがってきたものだと考えられるのである。

②彼の「症状」

今述べた諦念を別の角度から掘り下げていこう。感覚優位型の戸部君が、家族内コミュニケーションに順応するために用いてきた方法はいわゆる「しらけ」であった。すなわち、自らの内的感覚に忠実に行動するというよりは、それを分離し、抑圧し、表面的な形で適当にその場に合わせるということである。

6回目の四者での面談を見れば明らかな通り、彼と家族の間の溝は根深い。「小さいときから、ああ、違うなっていうのがたくさんあり（7回目）」、「小学生ぐらいから、まあ親も大したことないなと（7回目）」思い始めていたという彼が形作ってきたのが、「こんなもんか（7回目）」という冷めた態度であった。豊かな感受性は、同時に傷つきやすさでもある。周囲の人間が何気なく行っている言動の一つひとつから、過度の情報を受け取ってしまい混乱したり、自らの微妙な言外コミュニケーションが通じない悲しみを何度となく味わったりする。戸部君も、そうした傷つきから自分を守るために、内的感覚あるいは傷つき体験そのものを分離させ、一步引いた「冷静（7回目）」なところに身を置いてきたのではないか。「先生の話とかが、遅れて入ってくるんですよ。その間にいろいろ自分で感じて（1回目）」という言葉や、「あくびが出たら、ああ眠いのかなっ

と思うけど(4回目)」という言葉、そして「自分の中にもギャップがあって(7回目)」という言葉は、そうした意識と感覚(身体的なもの)との乖離をシンボリックに物語っている(そして、それらは彼を悩ませている「症状」と呼んでも良いものである)。

彼からは自分から何かをしようとする能動性や、「～したい」という強い内的欲求が感じられない。恐らくそれは、そうした自発性や欲求の源となるようなさまざまな感覚体験が、意識や行動と分離されているからである。レイン(Laing, 1960/1971)に倣って言えば、「内的自己」(感覚体験)と「にせ自己」との分裂が進み、現実世界に「にせ自己」だけで関わるようになったことによって、「内的自己」が枯渇し、内発的な欲求や感覚が見失われてしまったということになるかもしれない。ともあれ、彼の行動を動機付けてきたものは、内発的な欲求ではなく、奇妙な「バランス(3回目)」への配慮であった。「あまり周りが盛り上がると、自分は盛り上がらない(3回目)」という言葉や、兄が得意だったテニスではなく、兄がすぐにやめた剣道だからこそ意地で続けたこと(3回目)、「親が熱いんで、自分はちょっと色を変えてみよう(7回目)」とするところなど、周囲から少し「はずした(2回目)」行動をとるという彼の性格は、さまざまなエピソードの中に顔をのぞかせている。こうした性格が形作られた理由は、大きく二つあったと考えられる。

一つは、自らの内的欲求ではなく、周囲との「バランス」や「意地」という基準軸で行動することで、内的感覚を分離させておくことができ、これ以上傷つき体験を重ねずに済んだということ(熱くならなければ傷つくこともない)、もう一つは、それによってやはり周囲の人と自分は違うということを確保し、明に暗にそれを訴えて来れたということである。考えてみれば、親が熱いから自分は冷静にするという態度も両義的なのであって、そこには「あなたたちとは違うよ」というメッセージとともに、「違う態度をとっているのだからそのことに気付いてほしい」というメッセージが込められているように見える。同様に、厳しい剣道部を続けたことも「兄と同じでは嫌だ」という志向性と、「兄と

同じような能力があることを示したい」という志向性の両方に支えられていたと思われる。筋肉運動優位の家族の中で何とか自分の存在感を保つために、敏感すぎる内面を他者にそのままさらけ出す危険を回避しながら、けれどもそうした「自分らしさ」が存在することを何とか示そうとする点に、彼の性格が固まってきたのだと考えられる。

恐らくその豊かで複雑な内的感覚は、戸部君本人にもまだその実態を把握しきれていないものであろう。というより、彼自身は生来の資質を意識の外に追いやり、筋肉運動優位型の世界観の中で生きてきたと考えられる。だが、生来の資質と異なる仮面をかぶり続けることにはどこかで無理が生じる。不眠の最大の理由である「癖(2回目)」と呼ばれている何か、「いろいろと考えること(7回目)」というのは、抑えつけられ、無視されてきた感覚体験が、何らかの形で表出されることを求めて起こした騒乱のようなものではなかろうか。あるいは、そうした抑圧され鬱積していた感覚体験が、いよいよ他者に、そして彼自身に、受け止められることを要求し始めたのではなかろうか。

残念ながら、その感覚体験の核となっている事柄は面談終結まで彼から語られることはなかった。Dカウンセラーとの面談で「小学校3年くらいの頃の嫌な思い出(D5回目)」と述べたり、親とのギャップを一番感じたのはどんときかという質問に対し、「(小学生のときに仲良かった)友達を否定されたとき(7回目)」と答えたりしているから、何かその頃に意識と感覚の分離を決定付けるようなトラウマ的な出来事、傷つき体験があったのかもしれないと推測されはするが、むしろ私は「人には話をしたくない思い出(D5回目)」「何とかしたいけど、何とかさせたくないって感じ(2回目)」という彼の気持ちを大事にしたい。面談中もそのことを感じて「まあ、自分で何とかしなきゃいけないことっていうのもあるしなあ(2回目)」と述べたことが、彼との信頼関係を作り上げる上でかなり大きかったという印象があるし、現在でもその点については謎のままにしておく方が良いと感じている。後でも少し触れるが、"秘める"ということ、表現しない、あるいは関わりを拒否するという行為の中に、feeling of

self、自分という感覚の芽がある”(神田橋, 2004, p210)可能性があるからである。その謎めいた部分についてはそのままにしつつ、それを抱えながらこれからどうやって生きていくのかということを彼とともに考えていくことが、私にとっては彼を一個の主体として受け止めることだと思われた。

ともあれ、大学という、これまでのような外的強制力ないしは筋肉運動優位の環境のないところで、自らの内に封じ込めていた「癖」ないしは繊細な感受性という資質が動き出した—これが、彼の「症状」の内実だったのではなからうか。

③生来の資質と言葉文化の戦いという観点から見た青年期

一番の問題は戸部君が「自発性」ないしは「能動性」をいかに回復するかということであろう。6回目の面談での諸々の発言に最も顕著に現れている通り、彼は日常の行動パターンにおいても、また自分のこれからの成り行きに関しても、驚くほど受身的である。履修登録をしろと言われればする(D1回目、4回目)、友達が来れば一緒に遊ぶ(2回目)、電話で呼び出されれば面談に来る(2回目、5回目、7回目)、大学をやめろと言われれば「ま、それで仕方ないんじゃないですか(6回目)」と諦める。まさに、「言われるがまま、なされるがまま」と言っても過言ではないくらい、自分から何かをしていこうとする動きが見られない。

言うまでもなく、これは内的感覚や内発的欲求を分離・抑圧し、常に「バランス」といった外的な基準でもって自らの行動を決定してきたことのつけだと思われる。何かを指示され、そこから少し「はずした」態度をとるという形でしか、「自分らしさ」を確保する術を知らないのだとも言える。ところが、小さいころからずっと用いてきたその術をもってしても立ち行かない状況になってきている。すなわち、青年期になって「自分の望む方向へ進みなさい」「明確な態度決定をきなさい」といった要求、いわゆる「主体的であれ」というメッセージが、他者あるいは社会から突きつけられるようになってきたのである。

「主体的であれ」というのは、論理的には矛盾した言葉である。例えば、これを受けて素直に「主体的」になるのだとしても、それが真に独立的な「主体性」なのか、それともこの言葉への単なる「従属」なのかは、どこまで行っても決定できない。裏を返せば、この言葉に抗うことをもって、自らの「主体性」を主張するという論法が成り立たないわけではない。実は、戸部君が立ち止まっているのは、まさにこうした平面においてであるように見える。「大学をやめるにしろ、続けるにしろ、親の色に染まるとも言えるし、そうでないとも言える（7回目）」という彼の戸惑いは、大学をやめるにしろ、続けるにしろ、「態度決定をしろ」という親からのメッセージに従うことになってしまうことへの違和感から発しているのではないか。親の言うこととは少しずれた態度をとることによって「自分らしさ」を確保してきたこれまでのやり方に倣うならば、逆説的にも、このメッセージに抗って何も決定せず、親の言う通りに大学をやめさせられていく他はない。だが、それが親の言いなり（なすがまま）であることは火を見るより明らかである。大学をやめるにしろ、続けるにしろ、あるいは自分なりの態度を明確にするにしろ、しないにしろ、彼は「自分らしさ」を作り出すことができないのである。

こうしたことは、ロジックの遊びに過ぎないのだろうか。恐らくそうだろう。「自分の好きな道を選びなさい」と言われれば、その言葉に感謝しつつ、喜んで「好きな道」に進むのが普通感覚である。だが、戸部君の場合、その「好きな」という感覚それ自体が見失われている。彼の行動を動機付けてきたのは「好きか、嫌いか」という内発的欲求や内的感覚というよりは、「バランス」を保とうとする「意地」であった。言い換えれば、相手が「A」であれば自分は「not A」になるというロジックの平面で、「自分らしさ」を確保してきたわけである。内発的欲求として「好きな道」がはっきりと実感されている人とは異なり、そうしたロジックの世界に生きてきた彼にとって、青年期特有の「主体的であれ」というメッセージに孕まれる矛盾は想像以上に大きなものとなる。

別の見方をすれば、こういうことである。筋肉運動優位型の言葉文化によっ

て作られてきた世界観と、その裏面で抑圧され分離されてきた内的感覚との齟齬が決定的になっている。生来の資質が動き出し、内的感覚のマグマが活発化することによって、これまでの言葉文化と内的感覚の対応関係が混乱し、崩壊する。あらゆる言葉は内なる身体的・感覚的支えを持たない他者的なもの、外部的なものとなる。そうした状況の中で、言葉の持っているロジカルな側面だけが空転し始めてしまう。その結果、どのような身の振り方をしても、どのような言葉でもって自分を指し示そうとしても、何か自分の内的感覚とはずれているという違和感が、そこに生じてくるのである。

実は、青年期のアイデンティティ拡散というのは、青年にとってさまざまな「他なるもの」とのアンビバレンツが生じる点にその本質があるが（大倉，2002，同上）、それはこれまで有していた言葉文化が崩壊し、自分を指し示す言葉が他者的なものになってしまうからだと考えられる。すなわち、戸部君に限らず、生来の資質とこれまで身につけてきた言葉文化との間に齟齬がある場合、青年期にもう一度内的感覚を軸にした言葉文化を組み立て直さねばならないという状況—アイデンティティ拡散—が生じるのだと考えられる。

こうした状況において、人が「主体性」を回復するには何が必要だろうか。この点については、まだはっきりしたことは分らないが、一つヒントとなるのは先にも挙げた「秘めるとのこと、表現しない、あるいは関わりを拒否するという行為の中に、feeling of self、自分という感覚の芽がある」（神田橋，2004，p210）という言葉であろう。自分の中に、秘めなければならないこと、表現できないことが何か生じるのだとすれば、それこそはまさにこれまで身につけてきた言葉文化では処理できないような、生来の資質への気づき（萌芽）であるかもしれない。だから、それが何であるかということ（既存の言葉文化で）性急に言語化させるような関わりをするとすれば、その芽は容易に摘まれてしまうことになる。逆に、その小さな芽を内に抱えている独自の存在を丸ごと受け止めてやることを通じて、その芽が育ち、新たに組み立て直される言葉文化の核となっていくのだとすれば、そこに再び言葉と身体感覚のつながり

が回復され、その人なりの「主体的」な動きが出てくるのではなかろうか。「理解されることを求めつつ、内面のひだを隠そうとする」という冒頭に取り上げた青年期の本質を、そうした観点から改めて見直してみると、実践につながる大きなヒントが得られるだろう。

ただし、この点については、本稿でこれ以上突っ込んだ議論をすることはできない。今回は前半7回分の面談記録を考察するにとどまったが、機会を改めて後半7回分も含めた全面談記録を踏まえながら、彼の中にどのような「主体性」の芽が生じてきていたのかを、詳細に分析していく必要があるだろう。

4. まとめ

本稿では、外面に現れる印象との連続性を保たせながら、青年の激しい内面世界の動揺をいかにして了解していくかという問題意識のもとに、不眠を訴える戸部君という青年との面談を振り返った。戸部君と私の間にあった関係性から、人には分かってもらえないという諦念や彼の鋭い感受性に注目し、彼と家族の関係にそれらがどのような影響を与えていったか、また彼がその中でどのような性格・自分らしさを形作っていったかを考察した。そして、現在の不眠をはじめとする症状が出てきた背景に、生来の身体的資質と身につけてきた言葉文化の齟齬があると捉え、その際に言葉が他者的なものとなってしまうことが、アイデンティティ拡散状況などにおいて青年の眼前に独特の内面世界が広がってくる最大の要因であることを突き止めた。青年期の格闘を、外面的には身につけてきた言葉文化と生来の身体的資質との齟齬として、内面的には言葉が他者的なものとなって現れてくることへのアンビバレンツとして捉えることは、青年の外面と内面をつなぐための一つの有力な道筋となるだろう。

文献

- 井上信子(著) 神田橋條治(対話) 2001 対話の技—資質に寄り添う心理援助 新曜社
- 神田橋條治 1997 対話精神療法の初心者への手引き 花クリニック神田橋研究会
- 神田橋條治 2000 治療のこころ 巻五 平成五年 花クリニック神田橋研究会
- 神田橋條治 2004 発想の航跡2 岩崎学術出版社
- 河合隼雄 1982 中空構造日本の深層 三曜社
- 鯨岡峻 1999 関係発達論の構築 ミネルヴァ書房
- 鯨岡峻 2006 ひとがひとをわかるということ—間主観性と相互主体性 ミネルヴァ書房
- Laing, R.D. 1960 坂本・志貴・笠原(訳) 1971 引き裂かれた自己 みすず書房
- 大倉得史 2002 拡散 diffusion —「アイデンティティ」をめぐり、僕達は今 ミネルヴァ書房
- Spranger, E. 1924 土井竹治(訳) 1937 青年の心理 刀江書院